

武道における礼の概念 ——古代中国に成立した礼の考察——

末 次 美 樹
猪 越 悠 介

I. はじめに

昭和 62 年、日本武道協議会は「武道憲章」¹⁾を制定し、国際的に発展してく武道の基本的な指針を掲げた。オリンピックの柔道に見られるように武道の国際化は著しく、柔道はルールを変えながら JUDO として世界各国で発展していった²⁾。他の武道種目も世界各国に普及し、多くの関心が寄せられている。発展していく過程の中で、ルールやその形式(柔道で言えば、道衣の色や審判の体制等)を少しずつ変化させながら国際化に対応している種目も多くみられる。しかし、武道における礼の形式はその姿を変えることなく各種目の中に根強く残っている。試合の前後には必ず礼をし、会場を後にする際も礼をする。それは、武道に礼が存在するのは当然であり、武道における礼の教育が重要なものとして捉えられているからである³⁾。しかし、最近では、武道の礼が形骸化していると指摘されている⁴⁾。多くの国際試合や日本国内の試合においても礼が形骸化しており、一言でいうと礼が雑になってきているのである。礼という動作を行為として行えばいいのではない。武道の世界に礼が存在しているのは、意味があるからである。礼を謳いながら、礼を軽んじている。現在の武道に見られる礼はまさしくそのような状態なのである。

礼は、伝統的な武道文化として存在し教育されてきているはずである⁵⁾。武道における礼の教育は、時代とともに消滅する運命にあるのだろうか。武道教育において、礼を教えることは意義を失いつつあるのだろうか。あるいは、武道の教育にとって礼の教育は本質的なつながりがあり、現代においてもますます重視すべき内容があるのか。これについて検討し、武道教育の方向を明らかにすることが本研究の

目的である。この目的を達成するために、本研究ではまず基幹となる言葉、「礼」について分析をし、その構造を明らかにしていく。これらを確認することにより武道の礼の概念が再構築される。それは、武道教育にとって大きな意義があり、さらに優れた文化として人類に貢献すると考えられる。

II. 礼の基本概念

『広辞苑』⁶⁾によると、礼は「①社会の秩序を守るための生活規範、②礼儀・作法にのっとっていること、③敬意を表すこと。その動作。おじぎ、④謝意を表すこと。またそのために贈る金品」とある。礼の機能という側面からみると、①社会の秩序を守る機能、②相手に敬意を示す機能、③マナー表現などの作法の機能、④お礼など謝礼の機能が挙げられる。「礼」という一つの言葉の中に大変広い機能があり、それぞれが意味を含んでいる。

古代中国で成立した礼は、儒教社会の秩序維持機能という意味合いを強く持ったものであった。礼の根源的な機能が、社会生活にも生かされ、活用されていた。歴史的な時代の変遷とともに、礼の機能と価値は変遷してきたと考えられるが、その本質、つまり礼の普遍的かつ根本的な概念は保持されていると考えられる。

III. 古代中国における礼の天体一致の概念

礼という文字は、旧字体では「禮」と書かれ、「示」は神に仕えて祈ることであり、「豊」は二個の玉が器の上に置かれていることを意味する。神をあらわす「示」と祭器をあらわす「豊」があわさってできており、礼とは、もともと神に仕えてこれを祭ることを表す字であった⁷⁾ ことがわかる。古代中国人は、天の法則に従うことで、農耕生産のリズムや生活上の規則、さらには道徳的実践を決定した。万物は天より生じたため、人々は天の命令（天命）に服従しなければならず、天命にかなうか否かは、人の道徳的実践によって決定された。古代中国の思想は、天を主体とした倫理的性格が強く現れているのである。人間は生きるために天命に服し、豊作や飢饉という年ごとの変化のなかで支配される存在であった。人々は謙虚であり、

天の秩序と意志を恐れ、祈り、祭ったのである。自然は擬人化されて解釈された。

古代中国人は、複雑な宇宙自然の内容や動きを、形式的に分類し、それにより人間の生活リズムを形成しようとした。自然の動きと人間の営みを調和させ、きわめて単純な形で、その一致点を見出し、社会形成に役立てたのである。天を敬い、またそれに従うというような天地一体の認識に基づいた天人関連の思想を用い、これを礼と呼んだのである⁸⁾。

礼は、二つの存在の間の作用関係を表す言葉である。古代中国では、神と人、そして天と人との間の関係を示した。そして、その関係は、天が人を導き、教訓を与え、幸福を恵み、時には天罰を下すのであり、人は、天に祈り、天意を伺い、天命に従い、天恩に感謝するような関係にある。神や天に対して、人々は謙虚であり、崇敬の態度を保ち、身を清めるのである。そのような超越的存在に対する作用行為が礼である。つまり、人間を超えた天命的なものに関わることに礼の含意があると捉える事ができる。

IV. 孔子における礼の思想

礼の思想を説いた孔子の生きた時代背景を見てみる。孔子の生きた時代は、春秋時代末期（約 2500 年前、西暦紀元前 500 年頃）である。古い秩序が崩壊しつつあった混乱期であり、乱世と呼ばれた時代でもある⁹⁾。力を優先する下克上の社会であり、新しい専権を可能にするのは、力（具体的には暴力）であった。権力者は「法」を定め、それを力によって貫徹させようとした。つまり、暴力には暴力で対応する社会である。その連鎖が生じ、世が乱れ、そして、暴力で手に入れた権力は、圧政を生み、それに反抗する策略や暴力を育てることになる。それは、いわば、生（なま）の人間集団の間の戦争の人間関係である。徒党を組んで戦うことは孔子（前 551 - 前 479）の時代の支配精神である¹⁰⁾。

孔子はそれを社会混乱の原因であると考え¹¹⁾、新しい道徳と政治を提唱し、秩序ある社会を建設しようとした。それが、礼による教化である¹²⁾。孔子の礼の概念には、社会天下に関わるという含意と暴力に対置する礼という含意がある。その特質は、国家制度を敬う礼であり、儀礼儀式における行為規範である。国家を破壊

するのではなく、礼をもって国家に対する、そうすれば天下は安定するというのである。国家制度や儀礼儀式における行為範囲、また人々の生活を律する社会の総称、つまり、礼の機能を用いた公法的性格の強い社会規範の重要性を孔子は説いたのである¹³⁾。

人間主義、個人の修養といった人間の理想型を求めた孔子¹⁴⁾は、まごころに基づく仁が礼の中心にあると説く。まごころに振る舞う事がおのずから礼の形にかなう¹⁵⁾という思想のもと、礼に仁を注入し、内面的意義を重要視する。今までの伝統的な礼を維持しながら、その精神に新たな<仁>を加えることにより、古来の礼を生かそうとした¹⁶⁾。つまり、孔子によって、礼の内面も重視するという特質が加えられたのである。

金子¹⁷⁾によると、孔子の主張は、仁徳の普及であり、礼の実践であったことが伺える。それは人間道徳の問題であり、それを中心とする政治の問題である。そこには高遠な哲学はなく、「まごころとそれにもとづく思いやり」という、平凡な日常的な道徳や、常識的な教えが存在した。孔子の説く礼は、「形と精神の一致」であり、礼の形式は、まごころから発した仁徳の具現として位置づけられている。

また、孔子は、社会秩序のために礼による教化、すなわち人間そのものに礼を教えることを主張している。人間は、本来、学習能力が備わっており、万人が礼を学び、礼を知ることができることを主張したのである。すべての人間は教育次第で善人になれると説いたのである。

古代中国における礼の概念は、超越者に対する人間の関係としての礼であったが、孔子の礼は、天下に対する人間関係として把握される。一人一人の人間がどのようにして天下国家と向き合うべきかを論じたのである。それが礼の態度なのである。戦争や暴力(力)に対置して、礼(力)を設定した。両者は、対立的な人間の心の在り方であり、学習して身につけるものなのである。支配する者にも礼と仁が必要であり、服従する者にも礼と仁が必要なのである。孔子の礼を武道の教育的立場から見れば、暴力(感情の乱れ)を押さえる効果として、礼の教え(自己抑制)が存在していると捉えられよう。

V. 『荀子』¹⁸⁾における礼思想

荀子の生まれた時代は、前4世紀末近く（前310年代）と推定されている。孔子より後で、春秋戦国時代である。領域君主による力の支配が当然とされ、主権者がその全領域・人民を支配する体制、すなわち「領域国家」が形成された時代である。封建制の中で特権を占めていた支配階級の貴族たちは、封建制の崩壊により、その勢力を失い、諸国の王権者たちも古い支配階級を圧倒し、君権を強化することにつとめた。主権者たちは、自分の周りに政治家・官僚・学者等のスタッフを作り上げることで、他国を打倒し、天下の覇権を握ろうとする欲求は強烈であった。伝統的価値より、現在より生じる新しい価値が重要視された時代でもあった。

内山¹⁹⁾によると、荀子の思想は、「天人の分」と「性悪説」の二つが挙げられている。当時の儒家的思想である天人相関説を、天（外的自然）と人間（内的自然）は別であるという荀子の立場に立ち「天人の分」を主張するのである。天は独自の恒常性をもっており、人間を自然から独立させ、両者を両立させるというのが荀子の主張である。

荀子は、人間は生まれながらにして欲望があるため放置すれば「私利」を求め紛争が起きるといって「性悪説」の立場に立って礼を主張する。人間の性は悪であるため、それらが「群」をなして成立した社会は、秩序を自生的に実現できないとし、そこに必要な秩序は、人為的に実現すべしと主張するのである。人為によって、自身の「本性」を自己の制御下におくことができるという。この人為が、荀子の捉える礼である。荀子によって礼は欲望の制御という意味を与えられたのである。

人間の集団である「群」は「分」（つまり、区別・差等）によって保存される。荀子によれば、人間の欲望にそれぞれ限度を与え、集団内の人間を等級ごとに切り離す働きが存在することで、人間の集団、いわゆる「群」は存立できるとされている。この「分」が礼の実質的機能なのである。つまり、人間社会に必要な礼は、分であり、その分は区別・階級制度・度量分界（基準・限界）であり、それは人為的性質を備えているということが荀子の主張であろう。制度的に分割し欲望を制御させるのである。

荀子は、人間の本性は悪として、天と人間を分離して扱う。礼は自然の本性に従

って実現するのではなく、わざわざ制度化し、教え込まなければならない欲望制御法として考えられたのである。当時の悪の政治情勢を反映した礼思想であり、現実主義的であるといつてよい。荀子における礼には、性悪なる人間に対する社会制度的制御である礼の必要性が含意されている。これは、次に述べる調和原理・区別原理にもつながっていく。

VI. 『礼記』^{20) 21)}における礼の調和原理・区別原理

『礼記』は周末から秦、漢に至る儒者の礼の思想を集めて編集した書である。つまり、荀子より後の時代にそれまでの礼の思想を編集し、構成したものである。

『礼記』による礼は、人間関係にけじめを与え、人々の立場をはっきりさせる機能があると捉えられている。つまり、礼は、人間の社会的区別を明確化し、他人にどのように対すべきかを教えるものである。礼には、場面々で、自分の立場を知り、態度を切り替えさせる機能が備わっているのだ。立場によって区別することで、社会に調和が生まれると主張されている。礼は、区別と調和で社会秩序を保つ機能が認められ尊重された。

また、『礼記』には、人と接する上での心がまえとして、①敬を持って接すること②言葉を慎むことが最も重要であると説かれている。おごる気持ちを程よく持つことは、よい意味での自信につながり、生きる上での意欲を支えるものとなるが、それを持ちすぎることは、自己を拡大させ、現実のもの自分と見つめる調和的判断が崩れてしまう。心に生じる傲慢さやおごる気持ちは、現実に対する的確な判断を誤らせるのである。喜怒哀楽、愛、悪、欲、などの人間の感情は、程度を超えれば、人間に害となってはね返ってくる特性を持っているため、これを礼で以って調整する必要がある。つまり、何事も調和するというを根底において、程ほどにとということである。人と接する場合、表現が過剰にならない、また一方的にならないような心がけが相手に対する思いやりであり、礼に適った行為なのである。その根底には、物事に対する敬讓の精神が存在する。『礼記』における礼には社会制度的な人間関係は、敬讓の精神を根底にいたく「区別・調和」の原理が含意されている。

Ⅷ. 古代中国の礼思想から見た武道における礼の概念

礼とは、天に通じるものであり、具体的には社会の秩序を保つために、人間各々がどのように生活していかなければならないのか、またどのように人と接していかなければならないのかを教えるものであり、社会の秩序を保つために存在していた。また、自分の立場を知り、相手を尊重し、思いやりという仁の要素も含んでおり、礼によって人間と人間との調和をもたらしていた。特に弱者に対しての仁がなければ礼は成立しえないのである。そして、礼は、人々が円滑に過ごしていくための知恵でもあった。古代中国における礼の概念は、調和原理、区別原理といった社会の秩序を守る本質という重要な役割を果たしており、それは国、つまり天下を支えていた精神文化の精髓であった。

孔子の立場から武道の礼を解すると、人間の優しさからでてくる形として捉えることができる。礼の教化により、誰と戦うのか、誰と戦ってはならないのか、誰に優しくしなければならないのかを明確に把握するのである。

武道の場合、対等の相手と戦う。ルールや相手を尊重する際には、必ず規則に従う。そこに遵法の基本がある。遵法が体現化して現れるところに武道の本質があり、相手を正しく選ぶところに武道の礼の基本があり、その奥深いところに、仁が存在しているのである。

一方、荀子の立場から武道の礼を見てみると、一つ間違えれば暴力にもなる武道の技を礼によって管理することが可能であると捉えることができる。人間の持つ心の乱れを礼（人為）によって、規則に従わせているのである。人間の欲を礼によってコントロールし、一つ間違えれば乱闘する世界を礼によって正すのであり、そこに技が生きているのである。このような意味で武道を行うことは、礼法の一部であり、礼法に適っているものが技とってよいのではないだろうか。乱闘は技の理性が失われる精神の状態なのである。ルールの遵守も失われる。そして乱闘においては暴力が出現する。いわば、戦争状態であり、それは武道の場ではなくなるのである。

武道の勝敗は、しばしば激情をもたらし、調和を崩し、人格を損傷することがある。それゆえに、敬讓と調和の原理を重視する。礼は元来、天と一体となった社会

秩序を認識し実行する媒体であったため、社会を構成する全員に係ることであった。孔子にしても荀子にしても、国家社会全体に関わる礼を述べているのであり、武人にのみ関わるものではない。社会の維持発展の機能を与えられているのが礼である。したがって、礼は社会秩序の在り方によって働きが変化するのである。例えば、狭い集団の中の秩序を維持するために独自の礼法を造り出すことができる。学校における運動部で上級生が下級生を奴隷扱いするような上下関係の組織においては、下位の者は、上位のものに従順をしめす行為を行わなければならない。孔子は人間関係として礼の行為が大切であると説いた。荀子は悪意のある気持を抑えて礼の行為をすることを重視した。『礼記』では、人と接する心構えとしての礼を説いている。いずれにしてもそれらは社会全体を問題にしているものであり、狭い武道集団を超えたところにあるものである。武力や欲望による社会支配から礼による社会支配への思想転換が古代中国においてなされたのであり、その思想は現代においてもまた重要なものである。武道は特に礼を重んじている。閉鎖的集団を大きな社会の礼に開くことが必要なのである。礼は、古代中国において、天にまで達する広がりを見出されたのである。

IX. おわりに

現実の人間社会の秩序は時と場所により調整され、変化するものである。具体的な礼は、時と所、あるいは人によって変容するのが、全身心動作で表され、一定の内容を伝え合う非言語的なコミュニケーション方式を含むものであるという点では人間社会において広く安定して存在しているものであるといえよう。社会は常に変化していることから、その中で行われる礼も変化していく。社会生活上に礼のコミュニケーションが不可欠だからである。それをを用いる一定のしきたりないし規範があり、対象に対する尊重や服従、そして働きかけを表現する。礼は、行う場所や人、物に応じ、差異があるものであり、常に同じではない。賑やかに振舞うことを禁じている場合もあり、質素にしなくてもよい場合もある。そうした差異があるところに、礼の効果が存在するのである。人間の性情をうまく導き、人間関係を危険にしないための効果である。

武道における礼の概念

このような意味で、武道における礼も変化していく。しかし、本質的なところを見失ってはならない。そして、時代に応じた礼の捉え方を考察し続けていくことが必要である。古いまま形骸化する恐れがあるからである。武道の礼の形骸化の問題は、武道における礼の教育原理から大きく外れている。今、求められるのは、武道の中での正しい礼の教育である。それは、武道の優れた文化を再認識させ、活性化させる。更に社会における人間関係の調和に大きく貢献できるように展開する可能性が見られるのである。

【注記及び引用・参考文献】

1) 武道憲章 「月刊武道」1987年7月号 所収

武道は、日本古来の尚武の精神に由来し、長い歴史と社会の変遷を経て、術から道に発展した伝統文化である。かつて武道は、心技一如の教えに則り、礼を修め、技を磨き、身体を鍛え、心胆を練る修行道・鍛錬法として洗練され発展してきた。このよう武道の特性は、今日に継承され、旺盛な活力と清新な気風の源泉として日本人の人間形成に少なからざる役割を果たしている。いまや武道は、世界各国に普及し、国際的にも強い関心が寄せられている。我々は、単なる技術の修練や勝敗の結果のみにおぼれず、武士道の真髓から逸脱することのないように自省するとともに、このような日本の伝統文化を維持・発展させる努力をしなければならない。ここに、武道の新たな発展を期し、基本的な指針を掲げて武道憲章とする。

2) 中村民雄著：『今、なぜ武道か』、ベースボールマガジン社、2007年8月、pp.20-21

3) 武道憲章参考

4) 中村民雄著：『今、なぜ武道か』、ベースボールマガジン社、2007年8月、pp.123-129

5) 武道憲章 「月刊武道」1987年7月号 所収

(稽古) 第二条 稽古に当たっては終始礼法を守り……。

(試合) 第三条 ……勝っておごらず負けて悔まず、常に節度ある態度を堅持

する。

(道場) 第四条 道場は、心身鍛錬の場であり、規律と礼儀作法を守り・・・。

- 6) 新村出編：『広辞苑』、岩波書店、1998年11月、p2826
- 7) 下見隆雄著：『中国古典新書 礼記』、明德出版社、1973年5月、p9
- 8) 石川英昭著：『中国古代礼法思想の研究』、創文社、2003年1月
- 9) 金谷治著：『孔子』、講談社、1990年8月
- 10) 石川英昭著：『中国古代礼法思想の研究』、創文社、2003年1月
- 11) 同書、pp123-125
- 12) 金谷治著：『孔子』、講談社、1990年8月、p.105
- 13) 石川英昭著：『中国古代礼法思想の研究』、創文社、2003年1月、p110
- 14) 金谷治著：『孔子』、講談社、1990年8月、pp47-48
- 15) 同書、pp84-85
- 16) 石川英昭著：『中国古代礼法思想の研究』、創文社、2003年1月、p112 - 118
- 17) 金谷治著：『孔子』、講談社、1990年8月
- 18) 内山俊彦著：『荀子』、講談社、1999年9月
- 19) 同書
- 20) 下見隆雄著：『中国古典新書 礼記』、明德出版社、1973年5月
- 21) 竹内照夫著：『新釈漢文大系 第27巻 礼記』、明治書院、1971年8月